

Z会東大進学教室

## 直前東大物理発展演習

### 【2回目】



## 問題

【1】

《解答》

(1) ひもでつるされたおもりは、慣性力により電車の加速度と逆向きに動く。これに対して、風船は車の加速度と同じ向きに動いたから。

(2) 部分 A の進行方向に垂直な断面積を  $S$  ( $= \frac{\Delta V}{\Delta x}$ ) とすると、部分 A の運動方程式は、

$$\rho_a S \Delta x \cdot a = P_1 S - P_2 S \quad \therefore \Delta P = a \rho_a \Delta x$$

(3) 水平方向は図 2 で右向きを正、鉛直方向は上向きを正とすると、車内で見たときの力のつりあいの式は、

$$\begin{cases} 0 = \rho_a V a - T \sin \theta - \rho_h V a \\ 0 = \rho_a V g - T \cos \theta - \rho_h V g \end{cases}$$

(4) (3) より、

$$\begin{cases} T \sin \theta = (\rho_a - \rho_h) V a \quad \dots \textcircled{1} \\ T \cos \theta = (\rho_a - \rho_h) V g \quad \dots \textcircled{2} \end{cases}$$

$\rho_h < \rho_a$  なので、 $\textcircled{1}$  の右辺は正であり、 $\theta > 0$  と分かる。また、 $\frac{\textcircled{1}}{\textcircled{2}}$  より、

$$\frac{\sin \theta}{\cos \theta} = \frac{a}{g} \quad \therefore \tan \theta = \frac{a}{g}$$

(5) 物体が動く向きは浮力の水平成分と慣性力の大小関係で決まり、 $\rho_a$  より高密度の物体では慣性力の方が、低密度の物体では浮力の水平成分の方が大きいので、動き方が逆になる。

## 配点の目安

32 点

(1) 6 点

(2) 4 点

部分 A の受ける合力がわかって 2 点、運動方程式から結論を導いて 2 点

(3) 8 点

水平方向の力のつり合いの式に 4 点、鉛直方向の力のつり合いの式に 4 点

(4) 8 点

$\theta > 0$  であることを示して 4 点、 $\tan \theta$  に 4 点

(5) 6 点

**[2]**

《解答》

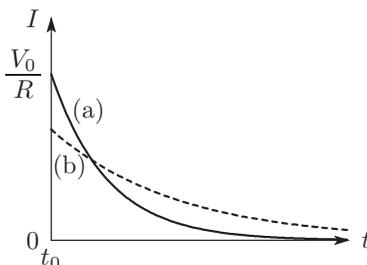
I(1) コンデンサー A の電荷が  $Q$  のとき、回路の方程式は、

$$V_0 = RI + \frac{Q}{C_A} \quad \therefore I = \frac{V_0}{R} - \frac{1}{RC_A} \cdot Q \quad \dots (*)$$

充電が進んで  $Q$  が 0 から増加していくと  $I$  は  $\frac{V_0}{R}$  から減少していく。また、(\*) を  $t$  で微分して、 $I = \frac{dQ}{dt}$  であることをふまえると、

$$\frac{dI}{dt} = -\frac{1}{RC_A} \cdot I$$

$I$  が減少していくと  $I-t$  グラフの傾きの大きさも減少していき、 $I$  は 0 に収束する。よって、 $I-t$  グラフは下図 (a) となる。



(2) (1) で  $R$  を  $R' (> R)$  で置き換えると、 $t = t_0$  での  $I$  は小さくなるとともに傾き  $\frac{dI}{dt}$  の大きさは小さくなるので、 $I-t$  グラフは上図 (b) となる。

(3) 電気量の保存より、

$$Q_A + Q_B = C_A V_0 + 0$$

回路の方程式は、

$$0 = \frac{Q_A}{C_A} - R \cdot 0 - \frac{Q_B}{C_B}$$

これらより、

$$Q_A = \frac{C_A^2 V_0}{C_A + C_B}, \quad Q_B = \frac{C_A C_B V_0}{C_A + C_B}$$

(4) 電気量が移動する前後の全静電エネルギーをそれぞれ  $E_0$ 、 $E_1$  とすると、

$$\begin{aligned} E_0 &= \frac{1}{2} C_A V_0^2 \\ E_1 &= \frac{Q_A^2}{2C_A} + \frac{Q_B^2}{2C_B} \\ &= \frac{1}{2C_A} \cdot \frac{C_A^4 V_0^2}{(C_A + C_B)^2} + \frac{1}{2C_B} \cdot \frac{C_A^2 C_B^2 V_0^2}{(C_A + C_B)^2} \\ &= \frac{C_A}{C_A + C_B} \cdot \frac{1}{2} C_A V_0^2 \end{aligned}$$

よって、ジュール熱として失われたエネルギーは、

$$\begin{aligned}\Delta E &= \frac{1}{2}C_A V_0^2 - \frac{C_A}{C_A + C_B} \cdot \frac{1}{2}C_A V_0^2 \\ &= \frac{C_A C_B V_0^2}{2(C_A + C_B)}\end{aligned}$$

II(1) 記号：(イ)

理由：時刻  $t_0$  の直後における回路の方程式は、

$$-L \frac{dI}{dt} = -V_0 \quad \therefore \quad \frac{dI}{dt} = \frac{V_0}{L} > 0$$

また、 $I$  は連続的に変化するので、時刻  $t_0$  での電流はスイッチ  $S_2$  を閉じる前と等しく  $I = 0$  であるから。

(2) 時刻  $t_1$  における回路の方程式は、

$$-L \cdot 0 = V_B - V_A \quad \therefore \quad V_A = V_B$$

電気量の保存より、

$$C_A V_A + C_B V_B = C_A V_0 + 0$$

これらより、

$$V_A = \frac{C_A}{C_A + C_B} V_0, \quad V_B = \frac{C_A}{C_A + C_B} V_0$$

(3) 時刻  $t_1$  において、コンデンサー A に蓄えられている静電エネルギーを  $U_A$  とすると、

$$\begin{aligned}U_A &= \frac{1}{2}C_A V_A^2 = \frac{C_A}{2} \left( \frac{C_A}{C_A + C_B} V_0 \right)^2 \\ U_B &= \frac{1}{2}C_B V_B^2 = \frac{C_B}{2} \left( \frac{C_A}{C_A + C_B} V_0 \right)^2\end{aligned}$$

回路のエネルギー保存より、

$$U_L + U_A + U_B = \frac{1}{2}C_A V_0^2 \quad \therefore \quad U_L = \frac{1}{2}C_A V_0^2 - (U_A + U_B)$$

これらより、

$$\begin{aligned}U_L &= \frac{1}{2}C_A V_0^2 - \frac{C_A + C_B}{2} \cdot \frac{C_A^2 V_0^2}{(C_A + C_B)^2} \\ &= \frac{C_A C_B V_0^2}{2(C_A + C_B)}\end{aligned}$$

(4) コンデンサー B の電気量が  $Q_F$  となったとき、コンデンサー A の電荷を  $q_F$  とすると、電気量の保存より、

$$q_F + Q_F = C_A V_0 \quad \therefore \quad q_F = C_A V_0 - Q_F$$

回路のエネルギー保存より、

$$\frac{1}{2}L \cdot 0^2 + \frac{q_F^2}{2C_A} + \frac{Q_F^2}{2C_B} = \frac{1}{2}C_A V_0^2$$

これらより,  $q_F$  を消去すると,

$$\frac{(C_A V_0 - Q_F)^2}{2C_A} + \frac{Q_F^2}{2C_B} = \frac{1}{2} C_A V_0^2 \quad \therefore Q_F = \frac{2C_A C_B V_0}{C_A + C_B}$$

(5) コンデンサー A の静電エネルギーをすべてコンデンサー B に移せたとすると,

$$\frac{Q_F^2}{2C_B} = \frac{1}{2} C_A V_0^2 \quad \therefore Q_F^2 = C_A C_B V_0^2$$

これと II(4) より,

$$\left( \frac{2C_A C_B V_0}{C_A + C_B} \right)^2 = C_A C_B V_0^2 \quad \therefore C_A = C_B$$

### 配点の目安

36 点

I(1) 3 点

グラフの概形に 2 点, 時刻  $t_0$  での電流の大きさに 1 点

(2) 3 点

各時刻でのグラフの傾きの大きさが (1) より小さいグラフを描いて 2 点,  
時刻  $t_0$  での電流の大きさが (1) より小さくて 1 点

(3) 6 点

$Q_A$  に 3 点,  $Q_B$  に 3 点

(4) 3 点

$S_2$  を閉じる前の静電エネルギーに 1 点, 閉じた後の静電エネルギーに 1 点, 答えに 1 点

II(1) 3 点

記号に 1 点, 理由に 2 点

(2) 6 点

$V_A$  に 3 点,  $V_B$  に 3 点

(3) 6 点

$U_B$  に 2 点,

$U_A$  に 2 点,  $U_L$  に 2 点

(4) 3 点

(5) 3 点

**【3】****《解答》**

- (1) 状態 A での状態方程式より, 気体の物質質量  $n$  は  $n = \frac{p_0 V_0}{RT_0}$  ( $R$  は気体定数) と表せる. これをふまえて, 状態 B, C での状態方程式より,

$$\begin{cases} T_B = \frac{2p_0 \cdot 2V_0}{nR} = 4T_0 \\ T_C = \frac{p_0 \cdot 4V_0}{nR} = 4T_0 \end{cases}$$

$$(2) \begin{cases} W_{AB} = \frac{1}{2}(p_0 + 2p_0)(2V_0 - V_0) = \frac{3}{2}p_0 V_0 \\ \Delta U_{AB} = \frac{3}{2} \cdot 2p_0 \cdot 2V_0 - \frac{3}{2}p_0 V_0 = \frac{9}{2}p_0 V_0 \\ Q_{AB} = \Delta U_{AB} + W_{AB} = 6p_0 V_0 \end{cases}$$

- (3) B → C の途中 ( $p, V$ ) までの状態変化で気体が吸収した熱量  $Q$  は,

$$\begin{aligned} Q &= \left( \frac{3}{2}pV - \frac{3}{2} \cdot 2p_0 \cdot 2V_0 \right) + \frac{1}{2}(2p_0 + p)(V - 2V_0) \\ &= 2pV - pV_0 + p_0V - 8p_0V_0 \end{aligned}$$

また, B → C の状態変化における  $p$  と  $V$  の関係式は,

$$\frac{p - 2p_0}{V - 2V_0} = -\frac{p_0}{2V_0} \quad \therefore p = -\frac{p_0}{2V_0}V + 3p_0$$

これらより,  $V$  の関数として  $Q$  を表すと,

$$Q = -\frac{p_0}{V_0} \left( V - \frac{15}{4}V_0 \right)^2 + \frac{49}{16}p_0 V_0$$

$V_X = \frac{15}{4}V_0$  までが吸熱過程で, この間の吸収熱量は  $Q_{BX} = \frac{49}{16}p_0 V_0$  と分かる.

$$(4) W = \frac{1}{2} \cdot p_0 \cdot 3V_0 = \frac{3}{2}p_0 V_0$$

- (5) (2)~(4) をふまえると,

$$e = \frac{W}{Q_{AB} + Q_{BX}} = \frac{24}{145}$$

**配点の目安**

32 点

(1) 4 点

B の絶対温度に 2 点, C の絶対温度に 2 点

(2) 12 点

$W_{AB}$  に 4 点,  $\Delta U_{AB}$  に 4 点,  $Q_{AB}$  に 4 点

(3) 8 点

直線 BC の方程式に 2 点, 吸熱量を  $V$  の関数で表して 2 点,  $V_X$  に 2 点,  $Q_{BX}$  に 2 点

(4) 4 点

(5) 4 点

$e = \frac{W}{Q_{AB} + Q_{BX}}$  に 2 点, 答えに 2 点



会員番号	
------	--

氏名	
----	--